

(洲本市立洲浜中学校における講演)

世界に目を向けよう！！

—これからの若者に託す思い—

平成16年1月8日

野村 一成

(駐ロシア日本大使)

只今紹介いただいた野村です。1956年に洲浜中学を卒業して47年、今日こうして後輩の皆さんにお話しする機会を持つことが出来て喜んでます。そもそもの話のきっかけは、昨年8月に卒業後初めて洲浜中学三年一組同窓会に出て、それぞれの人生を歩んできた級友に会い、文字どおり旧交を温めたことに始まりです。その時に感じましたことは、級友それぞれが歩んできた人生と比較して、外国に住み、外国人とのつき合いを中心とした私の歩みは、“特殊な”道だったのかなということです。同時に、当時と比べて大きく変化した日本及び世界の現状を見る時にこれからの日本にとって、私のような歩みが、外交官という職であるかどうかは別にして、“特殊”であってはいけないのではないのか、外国あるいは外国人との接点をより多く持つという意味において、より多くの日本人に共通の歩みであるべきではないのか、といった感じを強く抱くようになりました。そのような私の気持ちを効果的に伝えるのには、どういう方々にお話しするのが一番良いのかと考えました。6-3-3の日本の教育制度の中で、生徒が自分自身の得手、不得手、性格などを含めて真剣に自分自身を見つめ始める時期、それが中学校時代だと思います。どのような社会人になろうかということ自分の希望も合せて考え始めるのが、皆さんの年齢の頃だと思います。正に、そういう方々に対して、私が洲浜中学卒業後、半世紀近くの間社会で経験してきたことを基にして、これからの世界、これからの日本人はどうあるべきかについて私なりの考えたことの一部を皆さんに話したい。それが、今日、私が皆さんに話しかけたいと思った理由です。生徒諸君がこれからの進路などを考えるに当たって、少しでも参考になればと思います。

外交官とは？ どうして外交官に？

本題に入る前に、私が歩んできた外交官という職について少し述べたいと思います。昨年11月末に奥大使、井ノ上書記官という二人の有能な外交官がイラクで殺害されたことにより、“外交官”という言葉はよく耳にするようになってきました。しかし、どのような仕事をしているかということになると、イラクでの外交官殺害事件を通じて、世界の平和と安定のために日本としてやるべき仕事の一端を担っているという重要な仕事内容についてはよく知られるようになったと思いますが、必ずしも全体が明らかにはされておられません。現在の世界は、大小取り混ぜて、190もの国々から成っている(2003年3月1日現在)。文化、人種、宗教など多種多様です。仲の良い国々もあれば、対立している国々もある。国々同志の関係も様々で、国の政府と政府との関係もあれば、貿易のように民間同志の関係もある。国々の関係が平和で安定して発展するように、多くの国際

機関も作られています。その最大のものが国際連合です。そのような世界において、外交官とは、国を代表して、外国との良好な関係を築くように努めている人々の呼び名です。働く場所は、自分の国の場合もあれば、外国の場合もある。外国においては、多くの場合、大使館、あるいは総領事館と呼ばれる場所で勤務します。具体的にどのような仕事をしているのか？

外交官の仕事は、大きく分けて三つに区分されます。一つは、世界の色々な場所で起こっていることの情報をよく集めるとともに、外国との間での色々な問題の解決のための交渉に当たること、よく「外交交渉」と呼ばれている任務です。次に外国に居る自国民の利益を保護することです。日本人観光客が事件・事故に巻き込まれたような場合に、助けるために真っ先にかけつけるのが日本の外交官です。三番目に、日本という国及び日本人について広く世界に知ってもらうための広報・文化交流という任務があります。外国によって日本が正しく理解されねばならない。そのためのPRをしっかりとやるということです。以上の三つが外交官の主な任務です。このような外交官の仕事は、外国においては生易しくはありません。治安が悪い国もあれば、気候条件が悪い国もあります。そういう場所に住んで生活することだけでも苦勞を伴います。多くの場合、外交官は自分の国と外国とで生活する期間は概ね半々です。私の場合も、40年近い外交官生活の中で、外国生活は6ヶ国で、約20年間です。少し詳しく言いますと、ロシアのモスクワに三回住んで合計6年、アメリカのワシントンに2年9ヶ月、イギリスのロンドンに二回住んで合計4年半、マレーシアのクアラルンプールに3年半、デンマークのコペンハーゲンに1年半、ドイツのベルリンに1年半です。日本にいたときには、外務省という外国との関係の仕事をする政府機関が東京にあるので、主な仕事場は東京です。東京住いと言っても、両親が元気で洲本に住んでいた頃には、夏休みなどには必ず洲本に帰ってきました。当時、洲本に帰って来るたびに、故郷に帰ってきたという感じに加えて、住んで来た外国とか東京とかからはずい分と離れたところだなあとと言う、大きな距離感を感じたことを良く憶えています。

私がこのような外交官になろうと思ったのには、太平洋戦争が終わった直後に軍人であった父が語った私への言葉が影響を与えています。それは、「日本が軍事力をもって世界を制覇しようなどという時代は終わった。これからの日本は平和に徹する国として、すべての国々に尊敬されるような国にならなくてはならない。」としみじみと私に語った言葉です。外交官になろうとはっきりと決心したのは、洲浜中学三年生の頃だったと思います。

コール前ドイツ首相の言葉

このような外交官生活を40年もやってくると、色々な経験を否応無しに味わうことになります。喜怒哀楽の全てに加えて、危険との背中合わせの経験もありました。特に印象に残っていることは、世界の多くの人々に直接会って話し合う機会を持ったことです。本当に様々の方々と色々な形での出会いを楽しむことができました。今、私が大使を勤めているロシアのプーチン大統領とは、彼がまだサンクトペテルブルグ市の助役の立場であった時にお会いしたことがあります。そのような出会いの中で、私にとって物凄く有益で忘れられない言葉をいただくことが何回もありました。そのいずれもが、日本、特にこれからの日本人にとって有益な言葉ばかりでした。今日は時間の関係がありますので、その中から、一人だけを選んで紹介いたします。それは、ドイツという、日本と共に第二次世界大戦を戦って敗れた欧州の国の首相を18年間もつとめて、東と西とに分断さ

れていたドイツの再統一に成功した、ヘルムート・コール氏との出会いであります。私がドイツ大使の頃、何度も訪ねて話を伺いました。彼の話で最も印象に残っていることの 하나가、これからのドイツ人の在り方についての話であります。彼によれば、冷戦が終わって、これからの世界は大きく変わろうとしている、大小とり混ぜて多くの国々から成っている欧州も大きく変わる、欧州の統合は益々進んでいく、その中でドイツ人は、いつまでもドイツ人であるという意識の枠の中のみにとどまって居るのでは、欧州の変化、世界の変化について行けなくなる、ドイツ人は、ドイツの文化はしっかりと身につけながらも、ドイツ人であるのみならず、「欧州人」であるという意識を強くもつようにしなければならない、そうすることによってのみ、これからのドイツの繁栄がもたらされる、というのがコール前ドイツ首相の言わんとするところでした。コール前首相は更に、次のようなことも述べました。それは、ドイツ人は科学技術の面で秀でていることなどにより外国人から尊敬されてはいるかもしれない、しかし、必ずしも好かれてはいないと思う、これからのドイツ人は多くの外国人から好かれるようになるため努めなければならない、という言葉です。

激変する世界

私が何故コール前首相の言葉を皆さんに紹介したかと言いますと、それは、今日皆さんに私が話そうとしていることに関係があること、更に、世界の大きな変化に直面してドイツ国民に対してどのように行動すべきかの目標を示そうとしていることに私が感銘を受けたためであります。

さて、世界はどのように変化してきているのでしょうか？ まず、世界が本当に“小さく”なったな、ということです。めざましい科学技術の進歩が、人と物の物理的な動きと情報の伝達を速やかに行うことを可能ならしめました。特に、インターネットを初めとする電子工学の素晴らしい発展は、我々をして物理的な距離感を失わせることがあります。私はモスクワに居ながら、インターネットを通じて洲浜中学のホームページを通じて瞬時に中学の概要を知ることが出来る。e-mailという通信手段は、隣り村同志で連絡し合っているような錯覚をもたらす。モスクワから日本の知人に電話しますと、いきなり、「今どこに居るんですか？」と言う、「モスクワですよ。」と言うと、「声が余りに近くに聞こえるものですから、日本に帰っておられるのかと思いました。」と答える、このような電話のやりとりが数多くあります。

このような変化は、私どものような世代の人にとっては、正に革命的な変化であります。かつての私の仕事机の上には、文明の利器と言え、電話が一つ置かれていたのみでありました。今や私の机には、電話が二つ、そのうち一つは東京の外務省との直通のホットライン、LAN用のパソコンが一つ、更にインターネット用パソコンがもう一つ、合計4つもの器機が並んでいます。情報伝達も、e-mailを含めて、パソコンを通じて行われるので、これらの器機をこなせないと仕事になりません。私の世代の人で自慢気に「私はe-mailなんかやらない」と言う人が居ます。そういう人にはいち早く引退してもらう必要があります。まさかこんな時代がやってくるとは、つい20年前には考えられませんでした。皆さんの学校教育もコンピューターの習得を前提としたものに既になっていると思います。

二番目に思うことは、よくもまあ、これだけ多くの異なった民族が、それぞれ異なった文化を持ちつつ、“小さく”なっていく世界に住んでいるものだな、ということです。ロシアという国の中だけでも、100を超える民族が住んでいると言われています。世界中でどれだけの数になるのか測り知れません。また、交通の便の発達に

伴い、多くの民族が混ざり合っ一つに国に住むことが多くなりました。この傾向は特に欧州において著しいのですが、日本においても、かつて考えられなかった程に多くの外国人が住むようになってきました。私が大学生の頃の42～3年前に、欧州のある社会活動家から洲本で講演をしたいので案内してくれと頼まれて連れて来たことがあります。その時は、八丁目の通りを二人で歩いていると、通り行く人全員がこちらを物珍しそうに眺めるだけでなく、避けて通るような有様であったことを思い出します。

世界が多くの民族で混み合っている中で、国境という“垣根”を設けて、190もの国々がそれぞれ自分たちの社会で作ろうとしています。そうすると、今の世界で一体何が起きているのでしょうか？ どの国も自分たちだけでは生きていけない。お互いに足りないものを補い合いながら、依存し合いながら生きていかざるを得ない。日本は石油の輸入の9割近くを中東に依存している。日本は、機械、自動車などの工業製品を多くの国々に輸出している。世界が“小さく”なっていくと、お互いが互いに頼らざるを得なくなると同時に、お互いに離れた国々での出来事が非常に身近に感じられるようになったということだと思います。中東のイラクで今日起こったことは、直ちに日本でも知るところとなる。しかも、他人事では済まされない、身近な出来事として感じられるようになった。日本が何故イラクという国の復興に協力しようとしているのか？ 日本だけではない。実に多くの国々が色々な形でイラクの復興に努めています。それは、イラクという国での出来事を多くの国々が身近に感じているからであります。このように多くの国々がお互いに助け合わなければ生きていけないという考えが昔よりはるかに強くなっているのが今の世界であると思います。

しかし、その反面、世界にはとても悲しい動きがあります。その一つは、違った民族同志でのいさかいが次々と起きていることでもあります。小さくなった世界がいさかいを起こしやすくしている面もあります。民族同志のいさかいは、簡単に武力を用いての斗いとなる。現在の世界には、このような紛争が数え切れない。もう一つ悲しいことは、2001年9月11日のニューヨークの世界貿易センタービルへの無差別テロ事件を契機として、大規模な無差別テロが世界のあちこちで発生するようになってきていることでもあります。このようなテロが起こる背景には色々な原因がありますが、民族とか文明とかの対立、例えばイスラム文明のアメリカ文明への反撥といったことも背景にあるように思えてなりません。非常に残念なことであるし、解決の方法を見つけ出すのが困難な問題でもあります。

今まで述べてきたことを要約しますと、科学技術の進歩により、“小さく”なっている世界という“器”の中で、実に多くの民族が、多くの“垣根”を作ってひしめき合っ住んでおり、その結果、一方ではお互いに助け合っ、頼り合っ住もうということになっている反面、他方であちこちでいさかいが絶えないというのが今の現実の世界であるということになるかと思ひます。

相互理解の必要性

世界を少しでもより住み易いようにするにはどうすれば良いのか？ 一つの面白い試みが欧州連合(EU)でなされています。それは、“垣根”を取り除けるだけ除こうとする動きであります。二年前に駐ドイツ大使をしていた頃に、休暇をとって車でドイツからオーストリーに向けてドライブしたことがあります。高速道路を走っていて、そろそろ国境だから一時ストップしなければと思ひつつ走っていたら、いつの間にか道路のサインがオーストリー領に入っていることを示して驚いたことがあります。要するに、昔風の国境が存在しなくなってい

るということでもあります。EUの多くの国々の間では、通貨もユーロと呼ばれる共通のものとなっており、今や両替の必要もなくなっております。確かに“垣根”を除けば除くほど住み易くなることは間違いない。ただ、これはEUという、欧州文明の共通の基盤の上に立つ地域の中での出来事であり、世界の他の地域にそのまま当てはまるとは考えられません。やはり、“垣根”は多くの国々の場合には、存在するとの前提で住み易さを模索する必要があるということです。そのように考えると世界を住み易くするための方法は一つしかないと思います。それは、違った文化、違った民族の間で互いによく理解し合うように各国の人々が意識して努めることでもあります。互いによく理解し合うといっても、理解の程度が問題であります。少なくとも、「違って理解し、それを尊重すること」の程度までの互いの理解が出来上がってくれば、いさかいの数も減るであろうし、何よりも、いさかいの程度を武力の行使にまでいくことへの抑制になることが期待される、と私は信じます。

この点を少し詳しく説明します。違った文化、「異文化」と言います。これを十分に理解するという事は並大抵ではありません。イスラム文化を例にとりますと、私ども日本人にとっては、その宗教的、歴史的、社会的側面などをよく理解するという事は簡単なことではありません。しかしながら、イスラム文化の我々の文化との違いに着目して、イスラム文化の基本的な特徴を理解することは、そう難しいことではないと思います。もっと具体的に述べますと、イスラム教徒は、アルコールの入った酒は飲まない、豚肉は食べない、女性は肌を人前では見せない、一日に数回お祈りをする等は、我々の文化との大きな違いです。四年程前にマレーシアの大使をしていた時のことを話したい。マレーシアは、東南アジアの多民族国家で、人口の6割がマレー系でイスラム教徒、3割が中国系で主として仏教徒、残りの1割がインド系で主としてヒンズー教徒であります。オフィス街で昼休みの時によく見かけるのですが、マレー系、中国系、インド系の若い女性が楽しそうに話し合いながら歩いている。服装を見るとバラバラである。マレー系の女性は身体を全部覆う民族衣装にスカーフで髪を覆っている、中国系はミニスカートで袖なしのブラウス姿、インド系はサリーという民族衣装である。三人の服装の違いは、正にそれぞれの民族の文化の違いそのものですが、互いに違いを当然のこととして理解し、尊重し合うことにより、和気あいあいの仲良しの関係が出来上がっている。そして、それがマレーシアでは社会慣行として定着している。

これからの世界においては、日本も含めて、違った文化、違った民族同志の接触の機会が否応なしに多くなってきます。従って、学校教育も含めて、世界の主要な文化について基本的な知識を正しく学ぶことにより、偏見を無くし、違いを理解して尊重するようになれば、住みよい世界は生まれないと私は思います。

世界の中の洲本

欧州やアメリカ、あるいはアジアでもマレーシアのような多民族国家では、日々の生活において違った民族、文化と接触する機会が多い。日本では、まだ、そのような機会が比較的少ないのですが、これからはどんどん増えていくでしょう。淡路島も阪神・四国と橋で繋がったし、これからは外国人との接触が多くなっていくことと思います。国際的な行事も淡路島で開催されることが増えていくと思います。そういう中で、皆さんが自分たちの生きている社会を考える時に、それはもちろん洲本であります、しかし同時に、洲本と密接に繋がっている社会として、兵庫県があり、関西があり、日本があり、更に世界の多くの国々があるのだということを考えていただきたい。別の言い方をすれば、世界という広がりの中での洲本に住んでいるということでもあります。皆さん

が学校教育を終えて社会人になる時には、仕事その他の面で外国人とのつき合い、あるいは外国に出かけるということが“特殊”なことではなく、日常茶飯事である、そういう社会に日本の多くの地域が既になっているか、あるいは今後必ずなっていくし、そのような地域の中に洲本が間違いなく含まれることでしょう。このような変化に対して、皆さんに目を向けていただきたいこと、それは世界に対する関心であります。世界には、実に様々な国々と文化が存在している。それらについて基本的知識を学ぼうとすることが必ず皆さんの将来にとって役立つことになる、従って、そうしていただきたいと言うことを述べて、話を終えます。



今日の話の補足的な締めくくりとして、私が生徒諸君に望みたいことを一つ話したい。それは、話す言葉としての英語の習得に心がけて欲しいということです。“読み書き”も大切ですが、特に“話す”ということです。何故こういふことを言うのかということですが、私の切実な経験からくる話であります。それは英語を母国語としない国において起こることではありますが、現地の人と話して用を足したい時に、日本語で話しても相手が全く分からないとの前提で話すのであるから、迫力に欠けるし、何とかうしろめたい。ところが、英語で話すと、こちらの上手下手に関係なく、相手が当然に理解してしかるべきであるという気持ちで話すことになるので、迫力もあるし、何よりも、もし相手が分からなくてたじろぐ場合には優越感を持って対等以上の立場で話し合うことが出来ます。

今や英語は、多くの国々で共通言語として受け入れられるようになってきております。この傾向は、東南アジアと欧州において特に著しい。東南アジア諸国連合(ASEAN)は、いずれも英語を母国語としない東南アジア10カ国の国際協力組織であるが、そこでは元首レベルから事務レベルまで年間に200回を超える会議が開催されます。10カ国がそれぞれの言語で通訳を通じて会議を行うことは現実的ではない。どうしているか？ 英語のみを公用言語として会議が行われている。日本という国は、このような変化に対して明らかに立ち遅れている。洲浜中学においては、英語教育に力を入れて頂いていることと思いますが、今日の私の話を契機に、皆さんがより熱心に英語の勉強に取り組んで欲しいと思います。